

吉阪隆正の見たチャンディガールとB. V. Doshi

-フランス留学期日記帳の解読を端緒として-

中谷礼仁研究室

後期ル・コルビュジエとその弟子たちゼミ

1X18A137-9 湊 明人

論文の目次構成

<序論>

- 0-1. 研究背景と目的
- 0-2. 研究対象
- 0-3. 研究方法
- 0-4. 既往研究

<本論>

第1章 吉阪隆正のフランス留学

- 1-1. はじめに
- 1-2. 吉阪隆正とフランス留学
 - 1-2-1. フランス留学以前の吉阪隆正
 - 1-2-2. フランス留学
- 1-3. チャンディガール計画
- 1-4. バルクリシュナ・ドーシ
- 1-5. 小結

第2章 日記帳の記述

- 2-1. はじめに
- 2-2. 日記帳読み下しの方法
 - 2-2-1. 読み下しに向けての準備作業
 - 2-2-2. 日記帳の読み下し作業
- 2-3. 日記帳内のチャンディガール計画に関する記述
 - 2-3-1. 記述一覧
 - 2-3-2. 記述概要・判明事項
- 2-4. 日記帳内のバルクリシュナ・ドーシに関する記述
 - 2-4-1. 記述一覧
 - 2-4-2. 記述概要・判明事項
- 2-5. 小結

第3章 留学後の記述

- 3-1. はじめに
- 3-2. 留学後の吉阪隆正
- 3-3. 留学後のチャンディガールに関する記述
 - 3-3-1. 記述一覧
 - 3-3-2. 記述概要・判明事項
- 3-4. 留学後のバルクリシュナ・ドーシに関する記述
 - 3-4-1. 記述一覧
 - 3-4-2. 記述概要・判明事項
- 3-5. 小結

第4章 比較分析:留学が吉阪に与えた影響

- 4-1. はじめに
- 4-2. 吉阪とチャンディガール計画
- 4-3. 吉阪とバルクリシュナ・ドーシ
- 4-4. 小結

第5章 考察

- 5-1. はじめに
- 5-2. 吉阪の第三世界観
 - 5-2-1. 第三世界
 - 5-2-2. 留学以前の吉阪隆正と第三世界
 - 5-2-3. フランス留学を経た吉阪隆正と第三世界
- 5-3. 小結

第6章 結論

図版出典
参考文献
謝辞

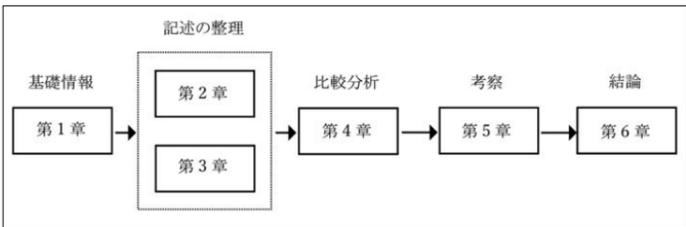


図1 本論文の構成

序論

0-1. 研究背景と目的

吉阪隆正は1950年8月から1952年10月までフランス政府給費留学生としてフランスに留学し、近代建築巨匠の一人であるル・コルビュジエのアトリエで、建築や都市など様々な分野で学びを深めた。吉阪がコルビュジエのアトリエで携わったプロジェクトの一つにインドのチャンディガール計画があるが、吉阪が行った功績は殆ど分かっていない。また同時にコルビュジエのアトリエで働いていたインド人建築家であるB. V. Doshiと交流を深めたことがわかっていますが、彼との関係についても殆ど研究がなされておらず不明なままになっている。よってこの二つの不明な事項を明らかにし、それらが吉阪に与えた影響を分析することが本研究の目的です。



図2 日記帳表紙スキャン画像

0-2. 研究対象

- ・フランス留学期日記帳4冊
- ・吉坂隆正集全十七巻をはじめとする留学後の記述

0-3. 研究方法

- ①吉阪の仏蘭西留学の概要をまとめる<第1章>
- ②チャンディガールとドーシに関する記述を整理する<第2章・第3章>
 - ・留学期日記帳における記述を整理する<第2章>
 - ・留学後の記述を整理する<第3章>
- ③留学期の出来事を比較分析する<第4章>
- ④比較分析結果から留学が吉阪に与えた影響を考察する<第5章>
- ⑤結論を述べる<第6章>

0-4. 既往研究

- ・倉方俊輔「吉阪隆正とル・コルビュジエ」（王国社、2005）
倉方氏による既往研究では、留学時を知る資料として、妻へ送った書簡と、著作内の記述を用いています。本研究では、ここに留学期日記を加えることで新たな視座を与えます。

留学時を知る資料

- ①書簡 ②留学後に書かれた著書内の記述 + 留学期日記4冊

二年間の留学中、吉阪は家族、ほとんどは妻の高久子に三日とあけず
に長い書簡を送った。保管しておくようにと指示を出し、今は数冊の
スクラップブックに綴じられている。内容にはアトリエや旅先での見
聞だけでなく、細かな感情や思考の経過が含まれる。単なる通信では
なく、自身にとっての備忘録と捉えていたようだ。

(倉方俊輔「吉阪隆正とル・コルビュジエ」、2005、王国社、p52)

「備忘録」と表現されている書簡もまた、日々つけていた日記帳を参照している

ル・コルビュジエから吉阪に影響を与えた建築は、マルセイユのユニテに尽きる。チャンディガールの仕事は、ル・コルビュジエを理解し、アジアに関心を向ける上では役立ったが、計画の内容には学んでいない。<中略>マルセイユのユニテだけが、造形や設計思想を通じて、帰国後の展開を左右した。

(倉方俊輔「吉阪隆正とル・コルビュジエ」、2005、王国社、p65)

チャンディガールの影響を日記を用いることで分析する。

本論

第1章 吉坂隆正のフランス留学

1-1. はじめに

本章では、吉阪隆正のフランス留学の概要をまとめると共に、チャンディガール計画とドーシの概要をまとめ、本研究におけるそれらの定義づけを行う。

1-2. 吉阪隆正とフランス留学

1-2-1. フランス留学以前の吉坂隆正

1917年2月13日に吉阪隆正が生まれてから、スイスと日本を歩き来た幼少期からフランス留学に向かうまでの人生の概要をここで述べた。吉阪はこの経験から、多言語を習得し、後の人生に大きく影響する。早稲田大学に入学後は佐藤功一や今和次郎に学び、特に今和次郎に学んだことは以後の吉坂の基本姿勢を構成する要素になったと言って間違い無いだろう。

1-2-2. フランス留学

吉阪隆正の留学期間は1950年8月23日に横浜港から船で出発し、1952年1月11日に羽田空港に到着するまでの約2年3ヶ月に及ぶものであった。船で横浜港を出てちょうど1ヶ月後の9月23日に吉阪はマルセイユに降り立った。翌日には既に建設が始まっていたマルセイユのユニテダビタシオンを見学する。そこで吉阪は「期待外れであった」と、感想を述べている。

こうして吉阪のコルビュジエのアトリエへの入所が決まる事となる。吉阪はコルビュジエのアトリエで計9つのプロジェクトに関わった。

- ・ロクとロブ
- ・ラ・サント・ボーム
- ・ストラスブルグの800戸のための競技設計
- ・チャンディガール・高等法院
- ・チャンディガール・カピトル
- ・マルセイユ・ユニテ
- ・サラバイ夫人邸
- ・ジャウル邸
- ・ナント・ルゼ・ユニテ

(福田京、島崎絵里、谷川大輔、山名善之「アトリエ・ル・コルビュジエにおける吉阪隆正のプロジェクト担当箇所の特定と考察」：設計図面及び日記の調査をとおして『日本建築学会学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠』2008年、日本建築学会、pp. 641-642)

その後の吉阪はコルビュジエのアトリエで以下のように活動する事となる。コルビュジエの仕事の設計は勿論のこと、吉阪は多くの旅行を行った。

1-3. チャンディガール計画

次にチャンディガールの概要を調べ、整理しました。チャンディガールという街は現在のインドの首都であるニューデリーから電車で3時間以上、北に移動した場所にある都市である。インドパキスタン独立の際、パンジャブ州が分離されるときにインド側の州都として計画され、その際にコルビュジエに依頼が入った。敷地は100ヘクタール以上あり、65のセクターに別れた都市計画で、セクター1に重要機能が集中している。

1-4. バルクリシュナ・ドーシ

バルクリシュナ・ドーシはインド人建築家であり、吉阪とは10歳違いであった。コルビュジエとカーンに師事し、VastuShilpaという事務所で活動し、2018年にはプリツカー賞を受賞している。

第2章 日記帳の記述

2-1. はじめに

本章では留学期日記帳に関する、調査、分析を行い、その結果を整理する。はじめに、日記帳を研究可能な状態にする為に行った「読み下し作業」について、その概要と方法を述べる。その後、日記帳から、「チャンディガール計画に関する記述」と「バルクリシュナ・ドーシに関する記述」を抽出、整理した後、その結果から分かる判明事項を述べる。

2-2. 日記帳読み下しの方法

貴重資料であり、更に解読が難しい留学期日記帳を研究するに当たって、スキャンによるデジタル化、そして読み下し作業を行った。その手順と具体的な注意点を述べる。

2-3. 日記帳内のチャンディガールに関する記述

2-3-1. 記述一覧

本研究の目的である、記述の整理をここで行う。記述を全て抽出し、引用した。

2-3-2. 記述概要

抽出した記述の概要を述べ、判明した事項を列挙する。

日記帳のチャンディガール計画に関する記述は大きく2つに分けられる。1つは「計画進捗の記録」、もう1つは「吉阪個人の取り組み・意見」である。

1つ目の「計画進捗の記録」では、初めてインドからの使者がアトリエを訪れた場面や、コルビュジエのインドに対する印象、アトリエでの計画への取り組み方などが書かれている。

2つ目の「吉阪個人の取り組み・意見」では、吉阪個人の行った事や、コルからの指摘、計画の批判が書かれている。

判明事項は以下の通りである。

・アトリエにチャンディガール計画の話が無い込んだのは、1950年11月18日である。

・コルビュジエは以前の仕事に手が付かなくなるほど、チャンディガール計画に注力していた。

・1951年4月5日に吉阪がチャンディガール計画の最終的な形である800×1200のblocを計画し、それに対してコルビュジエから「大きさを検討しろ」と指摘されている。

・チャンディガール計画には少なくとも1951年4月5日から1951年12月20日までの8ヶ月以上に渡って関わっており、コルからも指摘を受け、パースを描くなどして、計画に関わっていたことが分かった。

・吉阪はチャンディガールの高等裁判所の設計に携わり、パースを専門に描いていた。

・防暑対策について、クセナキスと論じている。

・吉阪はチャンディガール計画において、コルから「何でもしてやるから」と言われるほどに、重要な存在であった。

・ブルジョア計画であると評し、カーストの残るインドにおいてアーバニズムの有効性を懐疑している。

・伝統あるインドにおいて、コルビュジエが設計することを疑問視するような表現が見られる。

また以下のようなスケッチが日記内から見つかった。

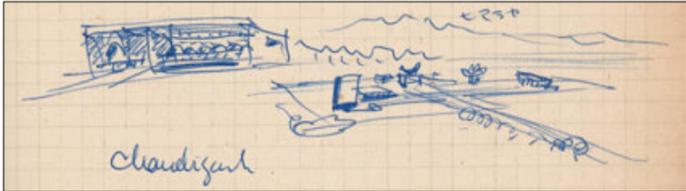


図3 吉阪隆正によるスケッチ

2-4. 日記帳内のバルクリシュナ・ドーシに関する記述

2-4-1. 記述一覧

本研究の目的である、記述の整理をここで行う。記述を全て抽出し、引用した。

2-4-2. 記述概要

抽出した記述の概要を述べ、判明した事項を列挙する。

日記帳における、ドーシに関する記述は「議論した内容の記述」と「私的交流の記録」の2つに分かれる。しかし、どちらについても、非常に短く、断片的に記録されているのみであり、その具体的な内容などについては不明である。

1つ目の、「議論した内容の記述」では、モデュロールにおけるトレースレギュレーターについて論じた事や、ドーシが自己制御について説いたことなどが書かれている。

2つ目の、「私的交流の記録」では、ドーシから本を借りた事や、誘われてインド舞踊を見に行った事、土産物を買に行ったことなどが書かれている。

判明事項は以下の通りである。

・ドーシは1951年10月12日にアトリエに入所した事が分かる。つまり、吉阪とは約一年間同じ事務所働いたことになる。

・モデュロールに関して何度も論じており、中でもトレースレギュレーターについて、二人ともその理論的根拠を疑っていた。

・ドーシが自己制御について説いた際、吉阪は旧来の考えと評した。

・仕事以外でも、本を貸し借りしたり、買い物に行ったり、花火や映画を見に行くなど、公私共に非常に深い親交があった。

・日記内では他の所員とはこのような記述がない。

2-5. 小結

吉阪は日記には個人的な記録として短い文章で最低限の情報を綴っている。それはチャンディガール計画とドーシのどちらの記述においても言えることであり、日記の記述からは具体的に吉阪の思想の変化や、考えたことなどを直接、詳細に知ることは出来ない。しかしながら、アトリエにとっての吉阪の存在や、吉阪が行った功績、ドーシとのエピソードなどは知る事ができた。また、チャンディガール計画には少なくとも1951年4月5日から1951年12月20日までの8ヶ月以上に渡って関わっており、コルからも指摘を受け、パースを描くなど、計画に参加していたことが分かった。留学期間の3分の1近くの期間に渡って関わったチャンディガール計画は少なからず、吉阪に影響を与えていると考えて間違いないだろう。さらに、ドーシとは1951年10月12日から吉阪がアトリエを発つまで一年近くの間交流があったことが分かった。

第3章 留学後の記述

3-1. はじめに

本章では留学後の記述における、「チャンディガール計画」と「バルクリシュナ・ドーシ」に関する記述を整理する。はじめに留学後の吉阪の人生の概要を調査し、その上で、対象の記述を抽出した。

3-2. 留学後の吉坂降正

留学後の吉坂の人生の概要を整理した。70年以降ではアジアへ積極的に出掛け、インドにもチャンディガール研修団という組織で3回訪れている。その後1980年12月17日にがん性腹膜炎で亡くなるまで、様々な分野で精力的に活動した。

3-3. 留学後のチャンディガールに関する記述

3-3-1. 記述一覧

本研究の目的である、記述の整理をここで行う。記述を全て抽出し、引用した。

3-3-2. 記述概要

抽出した記述の概要を述べ、判明した事項を列挙する。

吉阪の自筆の「チャンディガール計画」の設計手法や苦悩などの代弁としての記述。2つ目に「当時のアトリエの様子」に関する記述。3つ目に、「チャンディガール計画におけるコルビュジェへの批評」としての記述である。

留学後のチャンディガールに関する記述は、大きく3つに分けられる。まず1つ目に、「コルビュジェの設計手法や苦悩などの代弁」としての記述。2つ目に「当時のアトリエの様子」に関する記述。3つ目に、「チャンディガール計画におけるコルビュジェへの批評」としての記述である。

1つ目の「コルビュジェの設計手法や苦悩などの代弁」としての記述では、コルビュジェが律するものが何もないチャンディガール計画において悩んだことや、その自由の中で都市の計画を進めていった様子が吉阪の視点で語られている。またコルビュジェの発明発見のたねを、インドの計画の中に発見し学んでいることが分かる。

2つ目の「当時のアトリエの様子」に関する記述では、コルビュジェ不在の中での仕事が思うように進まなかった様子や、チャンディガールへ注力しすぎるあまり他の仕事が後回しになった様子が書かれている。またコルビュジェがパリに帰ると睡っていたアトリエが活発に動き始めた様子が書かれている。

3つ目の「チャンディガール計画におけるコルビュジェへの批評」としての記述では、チャンディガールを訪れた吉阪が、ピエールジャンヌレの存在の大きさに気付き、それに伴いコルビュジェの偉大さの再評価を行なっていることが分かる。これは留学を終えた吉阪がチャンディガールを見た感想の一部と取ることができる。また、63歳という年齢でインドに初めて接したコルビュジェにおける変化にも言及している。

判明事項は以下の通りである。

・**「何をやってもいいという自由ほど何をやっていいか迷うことはない」という苦悩の中で、コルビュジェがアルジェの計画などから大事にしてきた「正方形」と「モデュロール」をテーマに計画していたことが分かった。**

・コルビュジェのチャンディガール計画への注力度合いが分かる。

・チャンディガールを訪れた吉阪が、計画におけるピエールジャンヌレの存在の大きさに気付き、それに伴いコルビュジェの偉大さの再評価を行なっていることが分かる。これは留学を終えた吉阪がチャンディガールを見た感想の一部と取ることができる。

・「貧乏は一つの富なり」というコルビュジェの言葉に対しての、吉阪の解釈の変化が分かる。

・コルビュジェの見向きもせずに捨てるものへ愛情もつことによる発明発見が生まれていることを、インドの計画に発見し学んでいる。

・63歳という年齢でインドに初めて接したコルビュジェにおける変化にも言及し、アジアの持つ西欧社会への力を確認している。

判明事項は以下の通りである。

・**「何をやってもいいという自由ほど何をやっていいか迷うことはない」という苦悩の中で、コルビュジェがアルジェの計画などから大事にしてきた「正方形」と「モデュロール」をテーマに計画していたことが分かった。**

・コルビュジェのチャンディガール計画への注力度合いが分かる。

・**チャンディガールを訪れた吉阪が、計画におけるピエールジャンヌレの存在の大きさに気付き、それに伴いコルビュジェの偉大さの再評価を行なっていることが分かる。これは留学を終えた吉阪がチャンディガールを見た感想の一部と取ることができる。**

・「貧乏は一つの富なり」というコルビュジェの言葉に対しての、吉阪の解釈の変化が分かる。

・コルビュジェの見向きもせずに捨てるものへ愛情もつことによる発明発見が生まれていることを、インドの計画に発見し学んでいる。

・63歳という年齢でインドに初めて接したコルビュジェにおける変化にも言及し、アジアの持つ西欧社会への力を確認している。

判明事項は以下の通りである。

・**「何をやってもいいという自由ほど何をやっていいか迷うことはない」という苦悩の中で、コルビュジェがアルジェの計画などから大事にしてきた「正方形」と「モデュロール」をテーマに計画していたことが分かった。**

・コルビュジェのチャンディガール計画への注力度合いが分かる。

・**チャンディガールを訪れた吉阪が、計画におけるピエールジャンヌレの存在の大きさに気付き、それに伴いコルビュジェの偉大さの再評価を行なっていることが分かる。これは留学を終えた吉阪がチャンディガールを見た感想の一部と取ることができる。**

・「貧乏は一つの富なり」というコルビュジェの言葉に対しての、吉阪の解釈の変化が分かる。

・コルビュジェの見向きもせずに捨てるものへ愛情もつことによる発明発見が生まれていることを、インドの計画に発見し学んでいる。

・63歳という年齢でインドに初めて接したコルビュジェにおける変化にも言及し、アジアの持つ西欧社会への力を確認している。

判明事項は以下の通りである。

「アトリエ他の仕事が進まなくなるほど、計画に注力していた。」

【4R p60 1951/4/4（水）】

Corbu_ 印度のChadigard 《ママ》の計画に没頭していて以前の仕事はほつたらかしなのですることがないので、模型をつくつて一日過ぎる、226か如何に小さいかがよく感じられる、

「少なくとも1951年4月5日から1951年12月20日までの8ヶ月以上に渡って関わっており、コルからも指摘を受け、パースを描くなどして、計画に参加していた」

吉阪はその後退所までの間に、チャンディガールの高等裁判所の設計をサンベルと共に担当（五一年四月～五月）（吉阪隆正集第8巻「ル・コルビュジェと私」p270 荒井勝祥による解説より）

【4R p60 1951/4/5（木）】

Corbuに仕事を下さいといつたら、勝手に探せと、・印度計画800×1200のblocをつくつたが、大きさを検討しろ・■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■の住宅の寸法の検討、目下の一番の問題か、

【3L p5 1951/12/10（月）】

午盾、印度の仕事の分担を決めることから、皆から滞在延期をしろとの勧告、Corbuは何でもしてやるからという申出、■■■■■■■■■■ (dilemne)！

【4R p62 1951/4/9（月）】

Punjab首都計画はBourgeois計画だ、しかし、印度のcast《ママ》のある中の矛盾が果してurbanismeででなおせるだろうか、

【4R p62 1951/4/9（月）】

印度には立派な傳統があるのに、何故白人をよぶのか、白人崇拜の弊！日本だって白人のまねをしてみにくいものをつくつた、

3-4. 留学後のバルクリシュナ・ドーシに関する記述

3-4-1. 記述一覧

本研究の目的である、記述の整理をここで行う。記述を全て抽出し、引用した。

3-4-2. 記述概要

抽出した記述の概要を述べ、判明した事項を列挙する。

留学後のバルクリシュナ・ドーシに関する記述は、「パリでの記憶」と「留学後の交流」の二つに分けられる。

まず一つ目に、「パリでの記憶」では、ドーシと出会ったCIAMにおいて、吉阪とドーシが共通して西欧への第三者の目を持っていったという共通点が書かれている。また生活態度に至るまで、深く論を交わし交流していたことも書かれている。またドーシと行った自転車旅行についての記述が見られる。

判明事項は以下の通りである。

・吉阪とドーシの初めての出会いは、第8回CIAMである。

・吉阪がドーシをパリー大学都市の日本館に招き住まわせた。

・留学からの帰りにドーシの実家を吉阪が訪れている。

・吉阪のアフリカ横断の際に、ドーシの事務所を訪れ、1週間ほど世話になり、昔パリーでしたような討論を重ねた。

・ドーシもアメリカへの研究調査旅行の後に、日本を訪れ、吉阪がそれを案内している。

3-5. 小結

吉阪は留学後の記述において、全くチャンディガール計画における自分の功績に触れていない。留学後の記述からはコルビュジェの計画における苦悩などから、インドという国を知っていった過程が見られ、そこでの学びが盛んに書かれている。バルクリシュナ・ドーシに関しての記述は、留学時とその後の交流について書かれている。彼とは留学後も交流が続き、論を交わす関係であったことが分かる。

判明事項は以下の通りである。

第4章 比較分析：留学が吉坂に与えた影響

4-1. はじめに

本章では、第2章と第3章で整理した、留学時日記帳と留学後の記述のそれぞれにおける「チャンディガール計画」と「バルクリシュナ・ドーシ」の記述を比較分析し、既往研究とも比較分析を行うことで、日記帳の新たな情報による、新しい視座を加え、吉阪が生涯で見た「チャンディガール計画」と「バルクリシュナ・ドーシ」を調査分析する。

判明事項は以下の通りである。

「アトリエ他の仕事が進まなくなるほど、計画に注力していた。」

【4R p60 1951/4/4（水）】

Corbu_ 印度のChadigard 《ママ》の計画に没頭していて以前の仕事はほつたらかしなのですることがないので、模型をつくつて一日過ぎる、226か如何に小さいかがよく感じられる、

「少なくとも1951年4月5日から1951年12月20日までの8ヶ月以上に渡って関わっており、コルからも指摘を受け、パースを描くなどして、計画に参加していた」

吉阪はその後退所までの間に、チャンディガールの高等裁判所の設計をサンベルと共に担当（五一年四月～五月）（吉阪隆正集第8巻「ル・コルビュジェと私」p270 荒井勝祥による解説より）

【4R p60 1951/4/5（木）】

Corbuに仕事を下さいといつたら、勝手に探せと、・印度計画800×1200のblocをつくつたが、大きさを検討しろ・■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■の住宅の寸法の検討、目下の一番の問題か、

【3L p5 1951/12/10（月）】

午盾、印度の仕事の分担を決めることから、皆から滞在延期をしろとの勧告、Corbuは何でもしてやるからという申出、■■■■■■■■■■ (dilemne)！

【4R p62 1951/4/9（月）】

Punjab首都計画はBourgeois計画だ、しかし、印度のcast《ママ》のある中の矛盾が果してurbanismeででなおせるだろうか、

【4R p62 1951/4/9（月）】

印度には立派な傳統があるのに、何故白人をよぶのか、白人崇拜の弊！日本だって白人のまねをしてみにくいものをつくつた、

判明事項は以下の通りである。

「アトリエ他の仕事が進まなくなるほど、計画に注力していた。」

【4R p60 1951/4/4（水）】

Corbu_ 印度のChadigard 《ママ》の計画に没頭していて以前の仕事はほつたらかしなのですることがないので、模型をつくつて一日過ぎる、226か如何に小さいかがよく感じられる、

「少なくとも1951年4月5日から1951年12月20日までの8ヶ月以上に渡って関わっており、コルからも指摘を受け、パースを描くなどして、計画に参加していた」

吉阪はその後退所までの間に、チャンディガールの高等裁判所の設計をサンベルと共に担当（五一年四月～五月）（吉阪隆正集第8巻「ル・コルビュジェと私」p270 荒井勝祥による解説より）

【4R p60 1951/4/5（木）】

Corbuに仕事を下さいといつたら、勝手に探せと、・印度計画800×1200のblocをつくつたが、大きさを検討しろ・■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■の住宅の寸法の検討、目下の一番の問題か、

【3L p5 1951/12/10（月）】

午盾、印度の仕事の分担を決めることから、皆から滞在延期をしろとの勧告、Corbuは何でもしてやるからという申出、■■■■■■■■■■ (dilemne)！

【4R p62 1951/4/9（月）】

Punjab首都計画はBourgeois計画だ、しかし、印度のcast《ママ》のある中の矛盾が果してurbanismeででなおせるだろうか、

【4R p62 1951/4/9（月）】

印度には立派な傳統があるのに、何故白人をよぶのか、白人崇拜の弊！日本だって白人のまねをしてみにくいものをつくつた、

判明事項は以下の通りである。

「アトリエ他の仕事が進まなくなるほど、計画に注力していた。」

【4R p60 1951/4/4（水）】

Corbu_ 印度のChadigard 《ママ》の計画に没頭していて以前の仕事はほつたらかしなのですることがないので、模型をつくつて一日過ぎる、226か如何に小さいかがよく感じられる、

「少なくとも1951年4月5日から1951年12月20日までの8ヶ月以上に渡って関わっており、コルからも指摘を受け、パースを描くなどして、計画に参加していた」

吉阪はその後退所までの間に、チャンディガールの高等裁判所の設計をサンベルと共に担当（五一年四月～五月）（吉阪隆正とル・コルビュジェ、2005、王国社、p57）

【4R p62 1951/4/9（月）】

Punjab首都計画はBourgeois計画だ、しかし、印度のcast《ママ》のある中の矛盾が果してurbanismeででなおせるだろうか、

【4R p62 1951/4/9（月）】

印度には立派な傳統があるのに、何故白人をよぶのか、白人崇拜の弊！日本だって白人のまねをしてみにくいものをつくつた、

「吉阪は日記にはチャンディガールへの批判を綴っている」

判明事項は以下の通りである。

【4R p62 1951/4/9（月）】

Punjab首都計画はBourgeois計画だ、しかし、印度のcast《ママ》のある中の矛盾が果してurbanismeででなおせるだろうか、

【4R p62 1951/4/9（月）】

印度には立派な傳統があるのに、何故白人をよぶのか、白人崇拜の弊！日本だって白人のまねをしてみにくいものをつくつた、

判明事項は以下の通りである。

【4R p62 1951/4/9（月）】

印度には立派な傳統があるのに、何故白人をよぶのか、白人崇拜の弊！日本だって白人のまねをしてみにくいものをつくつた、

判明事項は以下の通りである。

【4R p62 1951/4/9（月）】

印度には立派な傳統があるのに、何故白人をよぶのか、白人崇拜の弊！日本だって白人のまねをしてみにくいものをつくつた、

判明事項は以下の通りである。

「ドーシとは第8回のCIAMで初めて会い、1951年10月12日にコルビュジェのアトリエに入所した」

判明事項は以下の通りである。

バルクリシュナ・ヴィタルダス・ドーシ

彼にはじめて会ったのは、一九五一年イギリスのホデスドンでCIAMの会議が開かれた席上であった。

（吉阪隆正集第9巻「建築家の人生と役割」p76）、

【2L p16 1951/10/11（月）】

CIAMで会った印度人来る、明日よりアトリエに来る由、

判明事項は以下の通りである。

「吉阪とドーシがモデュロールや生活態度について、討論していた」

判明事項は以下の通りである。

【2L p27 1951/10/31（水）】

Doshiとtracéについて論ず、彼もtracéの理論的根底を疑う

判明事項は以下の通りである。

【4L p96 1952/5/31（土）】

Doshiにトコヤで会う、共にスイス館の■■■■■■■■《Currot》氏を訪う、Modulorについて語る、

判明事項は以下の通りである。

「仕事以外でも、本を貸し借りしたり、買い物に行ったり、花火や映画を見に行くなど、公私共に非常に深い親交があった」

判明事項は以下の通りである。

4-4. 小結

留学期日記と留学後の記述を比較分析する事で、それぞれにおける記述が補完し合うような形で説明され、いくつかの新しい発見を見つける事が出来た。

中でも吉阪のチャンディガール計画に対する功績が、既往研究や、吉阪自身の留学後の記述と比較して、遥かに重要なもので会った事が分かった事は、大きな発見であると言えるだろう。また今まで、詳しく分かっていなかった、吉阪とドーシの関係もエピソードを添えて詳細に理解できたことも、等研究における成果といえるだろう。

判明事項は以下の通りである。

第5章 考察

判明事項は以下の通りである。

第6章 結論

判明事項は以下の通りである。

本研究において、留学後の記述と留学機日記帳を比較分析したことにより、日記帳の新規性からいくつかの新しい事実が明らかになった。

判明事項は以下の通りである。

判明事項は以下の通りである。